呪いとクズと私な俺

ロリコンじゃないけどロリお姉さんいいよね

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪いにより女の子になってしまう体質以外は平凡な青年であるケリーは妹のためにクズと悪党どもの集う町に薬を求めにやってくる。そこでたまたま助けてくれた自警団の合法ロリボスにハメられて借金を背負うことに。

「（性的な意味で）体で支払ってもらうか、労働で誠意を見せるかどっちがいい？」

「労働でお願いします」

他には毒舌女とか苦労人とかホモとか変態とかいるけど俺は元気です（信じて送り出した兄が自警団に入れられて白目ダブルピースに……）

果たしてケリーは心まで女の子にされてしまうのか、それとも呪いを解いてボスを逆に口説き落とせるのか……。合法ロリボス（イケメン）と呪いでＴＳ純情ボーイがヘテロなのか百合なのいっそＢＬなのかわからない関係の話です。

上記の内容に苦手なものがある場合は推奨しません。

目　次

人を信じると痛い目を見る ―― 1
愉快な自警団にようこそ ―― 10
ディナーの前にひと騒動 ―― 19

人を信じると痛い目を見る

――どうしてこうなった？

「よお、嬢ちゃん……かわいい顔してるじゃねぇか……」

「おいおい、手ぇ出したら値が下がるだろ」

いかにもチンピラという風体の男たちに取り囲まれる少女――は俺だ。

男として生まれ、男として普通にいい感じに嫁さんもらって幸せに暮らせると思っていただけに、この状況は気が狂いそうなほど恐怖と嫌悪しかない。

もっと魔法の勉強をしておけばよかった……と非力な女の体を嘆きながらこれから自分がどんな目に合うのか想像して身震いする。嫌だ、それだけは嫌だ。比喩とかではなく死んでしまう。

そんな絶望的な状況に光が差したような声が響く。

「そこの下っ端ども。遊び相手がほしいなら私が相手をしてやろう」

いつだって鮮明に思い出せる。見上げた先には風で揺れる外套。フードで隠れているものの表情は気高さと幼さが同居したような凛としたものが伺えた。声は少年のようだというのにその背丈からまだ子供であることがわかるのも目を引く要素だ。中性的なその出で立ちも、何もかもが整っており、一言で表すなら世界が変わったと思えるほどの衝撃。こんなにも、心が揺さぶられるような人は見たことがなかった。

「げっ!?　自警団がきやがった！」

「しかもありゃボスだ！　相手にならねぇ！」

慌てふためくチンピラたちは二種類に別れた。一つは突然現れた謎の幼い人物……自警団のボス、ということで合っているだろうか。その人を見るなりすぐさま逃げ出した。

そして残ったチンピラたちはあれくらいどうにかできるという自信の元、俺を人質にして自警団のボスを煽る。

「ちょっとばかし有名人みてぇだがお前みたいなチビ――」

「そうか、無謀だな」

言い終える前に、ボスとやらはチンピラの背後にいつの間にか降り立っており、ため息とともにチンピラたちが泡を吹いてその場に倒れてしまった。
「あまり実力行使は好きじゃないんだが……」
腰を抜かしてしまった俺に気づいたその人は振り返って俺を見下ろす。その際にフードが落ちて曖昧だった顔や髪が露わになった。
その人……彼女はとんでもなく愛らしい中性的な美少女だった。
「立てるか？」
少しだけ微笑んで安心させるように手を伸ばしてきた少女に、俺はすっかり心を奪われていた。しかしそこに大きな問題が立ちはだかる。
まるで俺の心が女になったかのように、俺の心は浮ついていた。

そもそもどうしてこんなことになったか。遡ること一週間前の出来事である。

俺が住む小さな村は正式な名前もないほどの小さな集落で地名から取ってコーヤ村と呼ばれていた。
基本的には穏やかで静かな、小さい村である。村人の八割がある問題を抱えているのだがそこは割愛しよう。
そして俺ことケリーはその村でも数少ない若者の一人。両親は既に他界しており、妹と慎ましく二人で暮らしている。
「シニカが倒れたって!?」
村で畑仕事をしていたら隣の家のおばちゃんが慌てて医者と俺を呼びにきた。
妹のシニカは歳が３つ離れたかわいい妹で少し兄離れができていないことが欠点だ。
そんなシニカが倒れたというんだから慌てるのも当然だろう。医者の診断を待つ間、生きた心地がしなかったが医者は少し渋い顔で俺

に言った。
「これは間違いなく呪毒病だな」
　呪毒病とはこの国ではよくある病気で、呪いなどの瘴気にあてられて体に毒が溜まっていくものらしい。元々呪術師が多いのだから仕方がない。特にこの小さな村は呪いの瘴気が他より強いのだろう。基本的に目に見えて害もなく、被害もなかったのでずっと無視されていたのがこういう形で現れてしまった。
「治るんだよな……？」
「体を浄化する特効薬があればすぐにでも治る。それか腕利きの呪術師か解呪師を連れてくるか……」
「薬はここにはないのか？」
　医師は力なく首を横に振った。この小さな村ではとても用意できる代物ではないらしく、大きな街になら売っているだろうと。
「なら俺が薬を買ってくるよ。しばらくは大丈夫だよな？」
「高熱や頭痛などに苦しむことにはなるがすぐに死ぬようなものではないよ」
　ならば善は急げ。すぐさまここから一番近くて薬が入手できそうな町を確認した。
「よし、ドロップの町なら……」
「ドロップの町だと？　あんな危険なところ、下手したら人売りに目をつけられるぞ」
　医師の忠告も最もだ。ドロップの町は大きい町だがギャングたち悪党が支配するこの国の掃き溜めとも言われる地域。
　特に、俺……いや、この村の人間の大半が悪党どものカモになりかねない。
「それでも一番確実なのはここしかない。他を探すってなったらそこにつくまでにもっと時間がかかっちまう」
　移動時間を考慮するなら多少危険でも賭けるしかないのだ。
「大丈夫。俺もう18だよ。チンピラくらいなら逃げ切れるさ」
　医師は仕方ないとため息を付きながら不在中は村の女手と一緒に様子を見ていてくれると約束してくれたので急いで近くの街まで向

かう。そこに薬は置いていないだろうが念のための確認と、ドロップの町までの辻馬車探しだ。
あるだけの金をかき集め、念の為換金できそうな親の遺品も荷物に詰めて熱で朦朧とするシニカに行ってくると一言声をかける。
「おにい、ちゃ……」
「大丈夫。兄ちゃん絶対薬見つけてくるから」
そう軽く頭を撫ですぐに町まで出向き、ドロップの町につくまで一週間の時間を要した。
最初は見るからにヤバそうな町なのかと不安ではあったが一見すると普通というか、特別おかしなところは見受けられない。
噂が独り歩きしてるだけで実はそんなに治安が悪いわけではないのかもしれない。
とりあえず一応注意しながら町の薬屋を探していると声をかけられた。
「君、よそから来た人？　なにか探してるなら案内するよ」
人の良さそうな女性だった。困っている俺の力になりたい、というオーラが溢れて見えるくらいに。そのオーラに油断していたのかあっさりと俺は返事をしてしまった。
「あの、薬屋を探しているんですけど……できれば町で一番大きな店を」
「薬屋かぁ。それならこの裏通りを真っ直ぐ行ってくる3つ目の角で左に行ったらしばらく真っ直ぐ行くと看板が見えるはずだよ」
ついていこうか？と上目遣いで聞かれてドキッとしてしまう。よく見ると結構な美人だ。耳に髪をかける仕草も相まって魅力的な女性だと再確認する。
そう、これが最初のやらかし。
気づいたときにはもう遅く、体の違和感を察知するや否や「一人で大丈夫です！」とさっきより高めの声で断ると示された裏通りに駆け込んだ。
物陰に隠れて落ち着こうと息を整えるために胸に手をやる。そう、そこには男ならないはずの膨らみ。

男のときより一回りも二回りも小さくなった背。当然ながら顔も基本的には同じだが同一人物と信じてもらうのは困難だろう。
ついさっきまで男であった俺はすっかり少女の体に変わっていた。服のサイズが合わなくなったこともあり少し動きづらい。
これは呪いだ。自分では制御することのできない呪い。解く方法もわからず、まともに恋愛なんてすることすら難しいこの呪いは村の外に出ると改めて恐ろしいものだと思わされた。
とりあえず落ち着いたし変化も止まったので薬屋へ向かおう。女になってから男に戻るのにはその時によって時間がまちまちなので男に戻るまで待っていられない。
裏通りを進み、そろそろ言われた看板が見えるはず……と思ったら一向に見えてこない。曲がる場所を間違えたか？と振り返ると誰かに見られている気配がしてぞっとした。
まさか、まさかと思うがこの町の噂を考えれば不思議ではない。
最初からカモとして誘導されていたとしたら――
人通りの多い場所に急がねばと駆け足になるが追ってくる気配は4、5……いや7。
追いつかれたら間違いなく終わりだとわかっていても女の体は男のときより貧弱でか弱い。おまけに服がダボダボで走るのも遅いときた。入り組んだ裏通りを駆け回っていたらあっという間に息が切れ、曲がり角の先が行き止まりなことに気づいてこれも誘導されていたことを悟った。
そして、下卑た笑みの男たちに抑えつけられた後に、自警団ボスに救われたのである。

「こんなところに迷い込むなんて旅行者か？　うちの町は危ないって聞いてなかったか？」
伸びてるチンピラを踏まないようにぴょんと跳んで俺に近づいてきて説教するボスとやらは怒っているわけではないが心配して注意を続ける。

「若い娘が一人で歩き回るのも自衛がなってない。俺がたまたま来なかったらどうするつもりだったんだ？」
「あ、ありがとうございます……その、道を聞いたらこうなって……」
「ああ、どうせ人のいい感じしたやつだろ？　仕込みだな」
　ですよねー。わかってはいたけどこの町危険が目に見えない分恐ろしい。
「それで、どこに向かうつもりだったんだ？　ついでだ、案内しよう」
　い、一応助けてくれた人だし信用したいのだがさっきの今でさすがに不安になるのは仕方ないと思う。少し躊躇っているとニッと笑ったボスとやらが振り返る。
「おお、ちゃんと学習してるな。偉い偉い」
　背に手をやってポンポンと褒めるような言い方に見た目の幼さとは合わず大人っぽさを感じてまだドキドキしてしまう。
　とりあえず、表通りに出てから目的地を話すとそのまま表を通って進んだ先に薬屋があったので安堵して店に入ろうとして体の違和感が生じてぴたりと止まった。
「ん？」
　用が終わったとばかりに立ち去ろうとしていたボスが不思議に思ったのか俺に声をかけてくれる。俺はゆっくり体を起こすとようやく男の体に戻ることができて深く息を吐いた。
「ん？　んんん？　男、か？」
「あ、えっと、はい……」
「どっちが、その……本来の姿だ？」
　聞きづらいというか踏み込むべきか悩んでいる様子だがこのまで世話になった人だし変なことにはならないだろう。
「呪いでたまに女になってしまうだけで元は男です」
　呪い持ちというだけであまりいい印象ではないが俺の場合自分に非がないのに誤魔化しても仕方ない。
　それに俺だけではない。村の８割が俺と同じ呪いに侵されている。
「ふむ、呪いか……解呪のために薬でも買いに来たか？恐らくそれは治せないと思うが」

「いえ、薬は妹のためです」
呪毒病のための特効薬を求めて一週間かけて町に来たことまで話してしまったが不思議とこの人はさっきの人と違って親切心というより興味という目を向けている。何か知っているかのようなそんな顔だ。
「ふむ、なら確かにこの店にはあるな。だが手持ちは足りるのか？あれ結構な値がするぞ」
店の中に連れられてボスが店主に声をかけるとすぐに呪毒病の薬を出してくれる。しかし……
「じゅ、１０万デニー!?」
手持ちの貴金属を換金したらギリギリ届くかどうかの額だ。できれば親の遺品だから売りたくはなかったが換金できそうな場所に行くかと薬を取り置きしてもらおうとする。するとボスは財布からポンと金貨を並べてなんともない顔で言った。
「足りるだろ？」
店主は釣りを用意しに一度バックヤードに下がっていき、俺はその間に慌ててボスに声をかけた。
「ちょ、ちょっとそんなことしなくてもいいですよ！　換金してくるので待っててくださ……」
「気にするな。それに、早いほうがいいからな」
バックヤードから釣りを持ってきた店主から薬と釣りを受け取ってボスはそのまま俺を引き連れて別の場所へと向かう。そう遠くない場所にあるポストのマークがついた店は中に入ると眠たそうな女性が「いらっしゃーい」とのんびりした声を出した。
「えー、君の村、なんて名前だったかな」
「こ、コーヤ村ですけど……あの、ここは？」
「というわけでコーヤ村の医者にこれを届けてくれ。えーっと、名前は……」
俺の質問に答えず、名前は？と促してくるので渋々「ケリーです」とだけ言うと伝票らしいものにさらさらとなにか書き込んで受付の眠たそうなお姉さんに薬と一緒に押し付けた。

「はーい。コースは？」
「スペシャルで頼む」
「はーい。相変わらず気前のいいことで～」
　よいしょ、とお姉さんが立ち上がると軽く準備運動をして「じゃ」と言い残すとその場から消えてしまい、困惑してボスにここはなんなのか尋ねると意外そうな顔をされた。
「ん？　知らんのか？　田舎だとあまり世話になることもなさそうだしそれもそうか……」
「確かに田舎ですけど……それより薬――」
「ただいま戻りましたー」
　さっき消えたはずのお姉さんが一瞬で現れ、伝票のサインを俺とボスに見せてくる。
　間違いなく医者の見慣れた筆跡だ。仕組みはわからないがしっかりと受け渡しができたらしい。
「妹ももう大丈夫だろ。よかったな」
「あ、ありがとうございます……！」
　こんなによくしてもらえるなんて思ってもみなかったので思わず気持ちが昂ぶってしまう。が、当然ながらそうなると……
「ほう、女になるのはなにか条件があると思ったが結構緩いのか？」
　ボスの言葉にハッとして自分の体を見下ろすといつの間にか女になっていた。これだからこの呪いは嫌なのだ。感情を丸裸にするような可視化。恥ずかしくなって更に心が乱れる。
「さて、速達スペシャルコースの代金ですがー」
　のんびりとした受付のお姉さんが俺の姿の変化も気にする気配なく代金を徴収しようとトレーを置く。
「ドドドドド田舎の村っていうか集落レベルの辺境なんでー、追加料金含めて二十万デニーでーす」
　俺はこの町に来て一つ学んだ。
　どんなにいい人そうでも絶対に裏がある。そう、料金を聞いたときのボスのしてやったりというあの顔を見て悟った。
「そうかぁ、そんな高くつくとはなぁ。まあ俺は払えるが……」

「あ、あの……俺そもそも頼んでな……」
「そういえば、今人手が足りなくてなぁ……どこかに誠意ある若者はいないかなぁ……？」
暗に脅迫されているような気がして嫌ですとも言えず、妹の件はもう心配ないのが更に姑息というか押しに弱いのを理解した上での行為に目眩がした。
俺に選択肢はないようです。

愉快な自警団にようこそ

「ここが我が自警団の拠点だ！」
良心につけ込んで速達代金の借金を背負わされた俺は半ば強引に自警団の本拠地へと連れてこられた。
まあ、ギャングとかじゃない正式な組織だから大丈夫だろう……。
外観としてはこざっぱりした館という感じで、看板は急造のものをずっと使い続けているようなものが雑に取り付けられている。
住居でもあるからかそこそこ広さはありそうだ。
「ボスのお帰りだー！」
意気揚々と扉を開いたボスが仰け反るまでに時間はいらなかった。
なぜ仰け反ったか。答えは簡単、開いた扉の向こうからとても良いフォームでリンゴを顔面狙って投げつけてきた男がいたからだ。
「やかましい！　普通に出入りすらできねぇのかこの騒音野郎！」
イライラした様子で近づいて来る赤毛の男はとても目つきが悪く、言ってしまえば服装も着崩していてかなりガラが悪い。
唾でも吐き捨てそうな勢いで男は後ろに倒れたボスを見下す。
「この……顔と実力以外取り柄のない社会不適合者の分際で一人前に声だけはでけぇから……」
顔と実力が取り柄ならそれで十分なのでは……？
とは思うものの、部外者なので口出しはできず横で行く末を見守っていると男はこちらに気づいてぎょっとした。
「てめぇ今度は何言って一般人を引き込んだ！　本当に見境のない――」
「失礼なやつだなー。俺はちゃんと選んで引き込んでるというのに。あと食べ物を粗末にするなよ。天罰食らっても知らんからな」
「神とかそれこそ知るか！」
ヒートアップしていく喧嘩に関わる勇気もなく、そっと逃げようかなぁ後退していると誰かとぶつかって慌てて振り返った。
「す、すいませんちゃんと見てなくて……」

「……」
そこにいたのは陰気な黒髪だった。自分より少し背が低いくらいで、片目が隠れるほどの前髪が邪魔ではないのかと気になっているとボスと喧嘩していた男がこちらに気づいて落ち着いた声をかけてくる。
「なんだクロム、帰ってきたなら声かけろよ」
「帰ってきたら痴話喧嘩してるから……」
正論というかそりゃ帰ってきてこんな状況ならどうしようって思うよな。
クロムと呼ばれた男に軽く頭を下げると彼はじっと見てきたかと思えばすぐに顔を逸らして館の中に入っていった。
「とりあえず立ち話もなんだから中に入ろうか」
「え、あ、はい……」
「ジョンー、お茶頼むぞー」
喧嘩していた男はジョンというのかお茶汲みを命じられて露骨に舌打ちする。
「俺は雑用じゃねぇぞ」
「彼が雑用係予定だから丁重にもてなさないと逃げられるが？」
「すぐ淹れてきまーす」
一瞬で態度を翻してそのまま館の奥へと消えていったジョンを見送り、俺はボスに応接室へと誘導された。柔らかいソファに腰掛けると改まった様子でボスが言う。
「さて、まあ雑用というのも外れてはいないが……君、その呪いについて詳しく教えてくれるかな？」
「呪い、ですか？」
確かに珍しい呪いではある。だが詳しく聞かれるようなことだろうかと思っているとボスが呼び鈴らしいものを鳴らして笑った。
「その呪い、解きたいだろ？　なら本職も混じえて聞いたほうが参考になる。それに……」
ボスは笑顔から一転して真剣な顔で低くつぶやく。
「俺が探しているやつと同じ犯人かもしれんからな」

ほどなくしてお茶と一緒にジョンが来て、その後ろにクロムがやってくる。呼び鈴で呼ばれたのはクロムのようだ。
「……何？」
「彼にかかってる呪いについて話を聞く。お前も気になるだろ？」
クロムは片方しか見えない瞳を見開き「……わかった」と小さく返事して俺が喋るのを待つ。
「ま、できれば経緯含めて話してくれ。その方が手がかりが増えるからな」
俺の、いや俺たちの村にかかった呪い。
とても悪辣で貧しい俺達にはどうすることもできない重い呪い。
少しだけ当時のことを思い出すと憂鬱になったが、解けるなら是非と願っているので記憶を手繰りながら昔話を始めた。

今から三年ほど前のことである。
あれは特に何かあったわけでもなく、本当にただの穏やかな一日に起こった悲劇だった。
村のものの大半がそれぞれの仕事をしているときに、事件は起こった。
「おおーい、ちょっと誰か手伝ってくれ」
とある農夫のおじさんが自分の畑に奇妙なものが落ちていると言い、それを除去するために男手を呼びつけた。
「なんだこれ？」
「さあ……気づいたらあったんだ」
それは子供くらいの大きさはある木彫りの人形だった。薄気味悪く、どこか寒気がするそれは手にしてみると意外なほど重く、年老いたおじさん一人で持ち上げるのはきつそうだった。
若い衆が数人集まってそれを持ち上げ、立たせてみるとより一層不気味で、興味本位で村人たちがなんだろうと寄ってきた。
元々少ない人口と、代わり映えのない日常に刺激が欲しかったのだろう。気づけば子供含めて八割がなんだなんだと集まっていた。
「これ、なんだろうなホント……」

「魔術師様とかならわかると思うが……」
こんな辺境の村にそんな大層なものがいるはずもなく、みんなが気になっているとその人形は突然カタカタと揺れだした。
みんな驚いて一歩引くが既に遅く、人形が一瞬紫色に輝いたかと思うと村中に重苦しい風が舞い、軽いパニックになっていると、ぱたりと風が止んでしんとした空気が場を包む。
その時だった。
「フハハハハッ！　実験は成功だ！　また私が天才であることが証明されたな！」
皆が困惑している中、高らかな笑い声とともに姿を表した男が屋根の上で得意げに手を広げていた。
その男は黒いローブを身に纏い、赤い目がこちらを嫌味な顔で見下ろしている。存在そのものが濁っているような異質さに思わず釘付けになる。
「人は本能に抗えず！　この集落もいずれ果てるだろうよ！　そうなればまた私の名は歴史に……いや、こんな集落では刻まれることなく終わるな」
男は「まあいい、次はもっと別の実験をするか」と呟いて屋根から降りると、着地を狙ったかのように男の降り立って場所に光の矢が降り注いだ。
「チッ、もう追いついたのか」
手のひらサイズの人形が身代わりになったのか男は別の場所に移動して顔をしかめる。
すると今度は白い服に身を包んだ清廉な美女が男を見て叫んだ。
「断絶の呪術師！　今日という今日は許しません！」
「おお怖い怖い。お前なんぞに捕まりたくはないんでね」
黒い煙とともに呪術師はその場から姿を消し、白い服の女性は使い魔らしい動物を放って後を追わせるが表情からして厳しそうなことが伺えた。
「皆様ご無事でしょうか？　私はクレリックのリコと申します」
丁寧にお辞儀をする美女に村長も困惑しながら応対する。普段な

らテンションが上がっていただろう男たちも現状に不安しかないのかおとなしい。
「あの男はいったい……」
「あれは王都では有名な呪術師でして、私はアレを追うために旅をしております。皆様体に異変などはありませんか？」
集まっていた村人が各々顔を見合わせるが特に変わった様子はない。それを確認してリコさんは安心したように微笑んだ。
「それは何よりです。しばらく様子を見たいのですがアレを追わねばならない身でして……付き添えない不徳をお許しください」
リコさんは再び頭を下げながら瓶を３つほど取り出して村長に渡した。
「万が一何かありましたらこれを。大抵の呪いには効果があるはずです」
「おお……これはご親切にどうも……」
人騒がせな事件だったなぁと皆が呑気にしていると、リコさんは早くも村から出て急ぎ足で呪術師の後を追った。
村人たちに異変は見受けられず、しばらくは普通にそれぞれの仕事に戻っていると夕暮れ頃に異変は姿を表した。
「いやあああああああっ!!」
男の声がまるで女のような悲鳴をあげており、皆が慌てて駆け寄ると腰を抜かした村人の若い男と、見覚えのない引き締まった肉体のイケメンがいた。
「ど、どういう状況なんだ……？」
困惑した若者たちが当事者である腰を抜かした青年に声をかけるとすすり泣いている見覚えのないイケメンを指さして声を震わせながら言った。
「その、そこにいるのはキャサリンなんだ……」
キャサリンとは村で一番の美人とも言われる男たちの憧れ的な存在だ。スタイル抜群の美人で気立てもいい理想的な彼女はよくモテていた。それがなんということだろう。肉体が変化したいからか服は引き千切れ、男の自分から見ても憧れるレベルのガチガチの肉体美

は女からしたらたまったものじゃないだろう。
「いやあああ……こんな姿になったらもう、もう生きていけない……」
声が男なのに喋り方が女のためすごく違和感がある。キャサリン本人であることは間違いないようで、これが呪いの効果であるならば村長が受け取った瓶の中身でどうにかできないかと思っていると、村中のあちこちから悲鳴があがる。
まさか、と思ったらそのまさか。あの場に居合わせた者が異性へと姿が変わるようになっていた。
条件こそわからないが姿が変わっていないものもこうなってしまうという可能性を秘めており、急いで村人全員が集まって、あの場にいなかった者も含め話し合いが始まった。
「キャサリンやほかの者にもクレリック様から頂いた薬を与えたが効果はなかった」
村長の絶望的な発言に村中がざわめき、村医者が場を鎮めながら言った。
「話を聞いた結果、姿が変わった者は直前になにかドキドキしたり、興奮したとのことで、感情の高ぶりが原因と思われる」
そんなの、防ぎようがないじゃないかと皆が嘆く中、医者は更に続けた。
「既に何人かは元の姿に戻っており、あくまで一時的な変化だと思われる。とりあえず解呪できそうな呪術師を呼ぶからみなそれまで耐えてくれ」
そうして、数日後に呪術師が来たが「自分じゃこんな高等呪術は無理だ」と言われ、更に上の呪術師を探すも法外な代金を請求されてしまい、村は諦めモードのまま呪いと付き合っていくことを考えるのであった。

そして解呪の手段もなく、今日に至るというわけだ。
「一応、村ではたまにしかならなかったんですよ、この体の変化……」
原因はそれとなくわかっていたのでみな気をつけるが意識してしまうと逆に異性にときめいたりしてしまい、目の前で異性化するのだからもう好意も性欲も丸わかりであり、半ば「あーはいはい」という関係が成されていた。皆同じ条件なのも大きい。
「ふむ、君の妹もか？」
「いや、妹はその時その場にいなかったので呪いはないです」
村の二割は室内で仕事や手伝いをしていたので妹は無事だった。だからかもしれないが村中に漂う呪いの毒に冒されたのかもしれないのだが。
「その後、村は呪われていない者からしかまともに子供も生まれないせいで元々少なかった人口は更に激減して……あんな体じゃほかの町に行けないし金もないので呪われていない若者が村がなくなっても生きていけるよう必死にみなでコツコツ金を貯めているって現状です……」
村はもう駄目だ。将来がない。だがまだ妹を含めて呪われていない子らのためにも資金を貯めて大人になったらそれを持たせて町に行かせようと計画している。
「子供……話を聞く限り皆見目のいい異性になっているようだし、下世話だが男が女になったら妊娠できるだろう？」
ボスの発言に「嗚呼……」と嫌な思い出が蘇る。
「いたんですよ……妊娠したやつが……」
「ほう」
「男に戻った途端死んだんですけど……」
実は女になったとある村の若者が呪われていない青年と肉体関係を持ったらしく、妊娠して周囲をざわつかせた。どうやら常にときめいていれば女の姿を維持できたらしく、それを利用してのことだったのだが悲劇は起きてしまった。
妊娠したやつが男に戻る瞬間、腹がどろりとした黒いなにかを撒き散らしながらのたうち回って死んだ。それを目の前で見ていたいず

れ父親になると笑顔で話していた青年は亡骸を抱えながら絶叫し、村では一つのタブーとなっている。
　というかそもそも行為を働こうとした時点で感情が乱れるのだから及ぼうとするともう変化してしまって駄目なのだ。
　つまり、断絶の呪術師の通り、村は断絶が避けられない。
「なるほど……断絶の呪術師。どう思う、クロム」
「多分、確定」
「なら話は早い。ケリーだったな？　君の事情はわかった。大変だったな」
　同情するような態度でボスは言う。
「自己紹介がまだだったな。俺はマリオン」
　ボスことマリオンさんはまっすぐ俺を見つめ、両隣のジョンとクロムを見てから言った。
「こちらの事情も話そう。俺も、恐らくその呪術師に呪われた身でな」
　呪われた身、という言葉に目が丸くなる。俺のように姿が変わるのかと思ったがそうではないようだ。
「呪いで成長が止まり、子孫を残せない。加えて、俺にはだいたい３０歳まで呪いが解けないと死ぬオマケ付きだ」
　淡々と事実だけを述べるマリオンさんは見た目が子供のままだというのにどこか色気を感じさせる声で俺に言う。
「ま、同じ呪われた者同士、協力しようじゃないか」
　マリオンさんの言葉に無意識のうちに頷いていた。何もしないまでは俺も村のやつらも呪いが解けず、マリオンさんに至っては死ぬのだ。協力して損することなどない。
「で、だ。ここから重要な話なんだが――」

「一応ここは借りてる館でな。タダ飯は住まわせるわけにはいかないルールがある。加えて君は俺に配達代金を返したいんだろう？」
「はい……」
　不本意だがそのとおり。それに協力とはいえなにもしないで過ごすのも俺にとっては居心地が悪い。雑用候補とか言ってたし、まあ力

仕事くらいなら……
「体で支払ってもらうか、労働で支払うかどっちがいい？」
なんかよくわかんないこと言ってきた。
「体って……その、どういう意味で？」
「性的な意味で、かな」
「労働でお願いします」
やっぱりちょっと早まったかもしれない。

ディナーの前にひと騒動

あのあと、ジョンに館を案内されることになり、目つきが悪いが丁寧にいろんな部屋について教えてもらっていた。
「厨房はここな。お前読み書きは」
「軽くなら……」
「なら自分で買ったものには名前書いておけ。他のやつの名前があるのも手を出すな。揉めるぞ」
完全に共同生活って感じである。棚や保存庫に名前が書かれたものがいくつかあるが、ここに来て会った三人以外の名前もちらほらある。
「所属してるやつはもっといるんだが今は不在が重なっていて、顔を合わせるのはしばらく先だ。まあ一人は買い物行ってるだけだからすぐ戻ってくるだろ」
その後、俺の個室へと案内され、この状況でも少しは前向きにならねばと考えていると扉を開けたジョンが「は？」と素っ頓狂な声をあげた。
気になって覗き込んで見るとそこは空き部屋とは程遠く、だいぶ散らかった汚部屋である。服が脱ぎ捨ててあったり本が床に山積みになっていたりとにかくひどい。
「なんだぁ、これ……」
困惑しつつもジョンが中に入って落ちているものをつまみあげると苦々しい表情を浮かべた。
「あの野郎……何空き部屋占領してんだ」
ブツブツ文句を垂れながらジョンは半ば諦めたように言う。
「悪いが見ての通りひどい惨状だ。片付けなんとか頑張ってくれ」
「え……俺が片付けるんですか」
「不満は犯人に言ってくれ。そのうち帰ってくるだろうしな」
「おーい、ジョンー」
すると、マリオンさんの声が聞こえてきたのでジョンが廊下に出る

と「うるせー」と返事をする。
「酒場で揉め事があったみたいだ。人数多いしお前も行くの付き合えー」
「わーったよ。すぐ行く」
渋々といった感じだが俺の方を向いて「そういうわけだ」と悪びれることなく部屋から出ていった。
残されてどうしたものかと部屋を見渡し、とりあえずゴミになりそうなものとそれ以外で分けようとのろのろとだが作業を始めた。
洗ってない服とかを見ると恐らく女物なのだがマリオンさんは女物着てないし別のメンバーだろう。
ゴミは思ったより少ないが脱ぎ捨てたと思われる服や読みかけの本を床に置くなどどれだけだらしないやつなんだ、と思ったところで布の山からあるものを発見した。
そう、女性の下着である。
女性の衣服がある時点で察するべきだったのだろうが実際に手にしたことはなくとも遠目でちらちら見たことのあるそれが手元にあるせいで心臓が早くなった。なぜか悪いことをしているみたいで手が震えてしまう。それ、を仕分けしたという事実がもはや背徳的でほかの衣服にくるんで見なかったことにするべしだと本能が訴えてきた。
「はー、まったく。結局私が夕飯担当じゃないです……か……？」
下着に気を取られていたからか、全く人が近づく気配に気づかず、いつの間に部屋に人が来たことを扉が開いてから認識したのである。
そこにいたのは髪を編んでまとめた女性。雰囲気からして成人してそうなくらいの歳だろう。向こうも俺に気づくなり怪訝そうな顔をした。
というか今下着を手にした変質者の姿であるので完全に絵面がアウトです。
「あなた……」
「いや、あの、これは……」
無表情で近づく女性になんと言い訳すればいいか慌てていると、女

性がきょとんと首を傾げて俺に聞いてくる。
「もしかして新入りですか？」
　どうやら俺を不審者とは思っていないのか、確認する言い方に思わず便乗するような形でそれを認める。
「そうですそうです！　ついさっき来たばかりです！」
「ああ、書き置きがあったので知ってますよ」
　よかった、さすがに伝えておいてくれたのか。
「でも女の子だったのは意外ですね。ここはまともな女は少ないですから」
　言われて「え？」と自分の体を見下ろすといつの間にか女になっていた。ああ、下着でドキドキしてしまったからか……と理解したがここで男ですと説明しても信じてもらえないだろう。すぐ戻るだろうしあとで説明すればいいかな……。
「ちょうどよかったです。あなた料理はできますか？」
「あ、あんまり……」
「でしたら私が教えますので……いやその前に」
　俺の体、というより服を見て彼女は眉をしかめ、深いため息をついた。
「その格好、サイズが合ってなくてだらしない上に男物じゃありませんか。しかも……」
　問答無用で服を捲りあげ、思わず悲鳴が出る。この人遠慮がないのか。
「ブラジャーをつけないとは何事ですか！慎みを持ちなさい慎みを！
　せめてサラシだけでもつけているならともかく……」
「ちょ、ちょっとやめ……」
「どこの未開の田舎から出てきたかは存じませんがそんな格好で外に出てみなさい！　この町の悪党どもに目をつけられるだけですよ！」
　なんで俺、こんなに怒られてるんだろ……。
「ああ、もう。ほらこれ使いなさい」
　適当な引き出しから布のようななにかを投げつけ、俺に渡す。広げて見ると体に巻くようなそれは恐らく女性が身につける下着だろう

ことはわかった。いやさすがにつけないよ。俺そのうち男に戻るし。
「あのー……その……俺男なので……」
「はぁ!?　ふざけたこと言って逃げようなんてそうはいきませんからね！」
　ガシッ、と胸を掴んでギリギリと音が聞こえてきそうなほど絞られて「痛い痛い痛い痛い痛い」と声が出る。本当に痛い。怨念すらこもっている。
「私より大きい癖してその怠惰は許しません！　ほら、これなら今のボロよりはマシです」
　そう言ってまた別のところから服を取り出して投げつけてくる。いやこれたしかに今の女の体ならちょうどいいかもしれないが男に戻った瞬間、最悪どこか破けてしまう。
「あの、俺本当に男……」
「いいから黙って着なさい！」
　気迫に負けてしまった。
　つけ方がわからない下着をぐるぐる手の中で回しているとしびれを切らしたのか手早く装着させ、じっと見られながら服を着替えると今までは服のおかげでまだ違和感ある姿だったのが完全に女になっている。
「よし、これならいいでしょう。この町はろくでもない悪党ばかり。しっかりとした装いでないとカモだと思われますからね」
　この町に来てすぐにカモだと思われたので説得力が違う。
　そのまま、先程案内されたばかりの厨房に連れられいよいよ男に戻ったら不審者でしかない恐怖を抱きながらか細い声で話しかけた。
「あの、俺……」
「そういえばその俺ってあのちんちくりんのセクハラ馬鹿の影響ですか？　女の子がはしたない。私って言いなさい」
　セクハラ馬鹿ってマリオンさんのことだろうか……俺の知る限りだとそれくらいしか思い至らないのでそう仮定するが結構な暴言である。まあもちろんそれとは関係ないため一応わかってもらえるかはさておき説明を試みる。

「いや、関係な……」
「私」
　圧が強い。有無を言わせぬとはこういうことを言うのだろう。
「……私……」
「いいでしょう。言葉遣いが低俗だと品がないですからね。気をつけるように」
　たかだか一人称なのにこんなに叱られると思っていなかったし、そもそも生まれてこの方ここまで女扱いをされてないので頭が破裂しそうだ。彼女は俺のことを完全に女と思っているしマリオンさんみたいにその変化を見たら扱いが変わるかもしれないが……
「で、なんでしたっけ？」
「お……私、ケリーっていうんですがあなたの名前は……」
「ああ、失礼しました。私はミネットと申します」
　名前に「ん？」という声が思わず漏れてしまう。自分の知るその名前は……
「子猫ちゃんってね、変でしょう？　そのうち慣れますよ」
　本人もわかっているのか苦笑して話を打ち切ろうとする。ミネット、子猫。そして猫につける名前でもある。あまり人の名前としてつけられるようなものではない。
「さて、今日は人数が少ないですし……あなた合わせて５人分……ですね」
　まあこんなもんですね、とぼやきながら買ってきた肉やらを並べて何を作ろうか考えている。
「うちはあまりお金に余裕がないのでできるだけ節制です。今後お使いを頼むかもしれないので覚えておいてください」
「……？　自警団なら公共施設じゃ……？」
　仮にも町の自警団なら多少なりとも活動資金なりが一定額ありそうなものだがそうなると収入源はなんなのだろう。
「あなた、知らないでここに来たんですか？　ここは非公式の組織なので町の治安を勝手に維持してるだけです。収入は微々たるもの。たまに町の人から差し入れ貰えばごちそうです。というか、分類的に

はギャングたちとなんら変わらないのですよ」
「えっ……」
衝撃の事実にぽかんとしてそのまま固まる。いいことをしているんだろうがその実は非公式の組織……そんな場所に知らないで入った……いや入れさせられたことに今からでもなかったことにしたいと言いかけたところで体に異変が生じた。
――徐々に元の体に戻ろうとしている。
女物の服だから大きくなる体に布がブチブチと嫌な音を立てあっこれまずいと後ずさるも既に遅く自分の惨状を見たくないあまり目をつぶってしまった。
「あれ、どうしまし……」
ミネットさんの声が途切れる。恐らく今の俺を見て絶句しているんだろう。
「へ……へ……」
震える声とともにミネットさんが後ずさる気配がし、風を切るように麺棒が投げつけられ俺に命中した。
「変質者――ッ！」
「誤解です――!!」

その後、帰ってきたマリオンさんたちによって助けられたのだがその後事情を理解してもらえるまでかなりの時間を要した。
「説明しておいてくださいよ！」
夕飯になってまでミネットさんはジョンに苛立ちをぶつけていた。
「仕方ねぇだろ急いでたんだからよ」
「そうやってあなたはいつもいつもいつも……いつも！　いつも私にちゃんと説明しないじゃないですか！」
「あとで説明するって言ってるだろうにネチネチネチネチお前は――」
「その辺で痴話喧嘩はやめておけ。せっかく新入りが来た祝いしてるっていうのに……」

マリオンさんの一言で二人は舌打ちしつつも引き下がり、クロムがやれやれといった顔でスープを飲み干す。
どうやら祝いとやらは酒をついでに買って帰ったとのことだがそれも含めて勝手に無駄遣いするなとミネットさんに叱られたらしく、マリオンさんが一人ちまちま飲んでいるだけだ。
ふと、クロムがこちらをじっと見ていることに気づいて軽く会釈するとすぐに目をそらされた。
「ところで俺も女の格好したケリーが見たかったんだが」
マリオンさんが思い出したように言うかと思えば俺を微笑ましいものを見る目で見てくる。
「いやぁ、さぞかわいらしいだろうな。俺が見たのはパツパツのあちこち破れたボロ布を着ていた男のケリーだからな」
「かわいいとかいわないでください……」
本気でショックなのでやめてほしい。俺は男なのに。
「照れてるのか？　ん～？　ウブだな～」
いつの間にかすぐ近くまで近寄ってきたマリオンさんがまだ酒の残ったグラス片手に肩に手を置いた。
「なあ、俺にも見せてくれ、な？」
見た目に反してやけに色っぽい囁きにまた心が乱れるのがわかる。まずい、また姿が、と焦るとマリオンさんが「ぎえっ」と短い声をあげて倒れた。どうやら飛んできた木の実の殻を指で弾いて飛ばしたらしく、犯人はミネットさんだ。
「お行儀が悪いですよ。自分の席に戻りなさい。あとそうやって隙あらばセクハラするような真似も控えるように。あなたもですよケリー。そのセクハラチビは男女問わずセクハラしてくるのではっきりと態度で示すのが正しいです」
「は、はい……」
ミネットさんとは最初のトラブルこそあったがこうやってマリオンさんを諌めてくれる人だし少し安心できそうだ。
「つーかお前、空き部屋占領してたのアレなんだよ。お前の部屋あるだろ」

「うるさいですね。あなたには関係ないことです」
「空きが必要になったときにあんなクロムの部屋みたいな状態だと困るんだよ」
「失礼な！　クロム君の部屋よりはマシですよ」
「……あの……俺いるんだけど……」
　クロムの声は喧嘩する二人に届かず、ボソボソとなにか言っているのを無視され、酔ったマリオンさんはそれを止めることなくぐだぐだの食事が終わった。
　片付けを手伝うことになったので皿を下げているとクロムが手伝ってくれるのか厨房へ皿をいくつか運んでくれた。
「ありがとう、えっと……クロム？」
　冷静に考えるとちゃんと自己紹介していなかったので不安だったので首を傾げつつ確認の意をこめて言うとすぐにそっぽを向かれてしまう。そのまま自室へと戻ったクロムに嫌われてしまっただろうかと不安に思っているとミネットさんが「ああ」と俺に声をかける。
「クロム君はいつもあんな感じですから気にしなくていいです。ちょっと偏屈ですがいい人ではありますから」
　一応フォローされてはいるがこの自警団、大丈夫なんだろうか……と不安が募るばかりである。